
第 10 回夢洲新産業・都市創造セミナー
『万博プロデューサーとの共創
～未来を共に創る Beyond SDGs 万博に向けて』

開催報告

第10回夢洲新産業・都市創造セミナー 『万博プロデューサーとの共創～未来を共に創る Beyond SDGs 万博に向けて』 開催報告

第10回夢洲新産業・都市創造セミナー「万博プロデューサーとの共創～未来を共に創る Beyond SDGs 万博に向けて」を、2021年9月17日(金)オンラインにて、一般社団法人夢洲新産業・都市創造機構主催で開催致しました。経済界、学界、医学界、経済団体、行政機関等から沢山の方々にご参加いただき、盛大に開催できました事を厚く御礼申し上げます。

第1部 講演

講演テーマ「いのちの未来」

石黒 浩 氏

大阪大学大学院基礎工学研究科荣誉教授 ATR 石黒浩特別研究所所長(客員)

(公社)2025年日本国際博覧会協会 テーマ事業プロデューサー

テーマ「いのちを拓げる」

タイトルの「いのちの未来」、私のパビリオンの名前です。私自身が、いのちは拡張する。その拡張とは科学技術との融合しながら、人間がいのちの可能性をこれから益々拓げていく。そういう科学技術に支えられたいのちをパビリオンの中で展示していきたい。30年後、50年後の未来を我々は技術により自分たち人間の可能性、生態系の可能性をどの様に拓げていくかを展示し、伝えるのが私の役目だと思っております。単にいのちだけではなく、環境、生態系も含めたいのちはどうあるべきか、どう考えていくべきか、いのちとは何かを伝えたいと思います。万博の会場が、人間だけのいのちをテーマにした会場だけではなく、中央に静けさの森があり、生態系を含めた幅広い、いのちの可能性を展示します。人間と環境、これが科学技術によりどう進化していくのか。未来において我々はこの様な新しい人間像、環境像を得て行くのかを考えたいと思います。

人間は時間、空間、能力の制約を克服する為に活動してきました。農耕が始まった弥生時代から技術は始まり、人間はその能力を拡張してきました。

現在、コロナでワクチンを皆さん接種されているように、技術なしでは今の生活はありませんでした。人間は生活も維持できないし、今のような寿命を享受することもできないわけです。現在のように70歳、80歳まで生きるようになったのは最近です。江戸時代は20歳、30歳が寿命でした。技術によって格段に寿命を延ばした事は明らかです。逆に言うと、技術なしには今の人間はあり得ない。その意味で人間は自然を克服する為に活動していると言っても良いかもしれません。

生態系の制約、自分自身の体の制約も克服するのですが、生態系から環境も作り変えてコントロールしてきました。例えば、大阪でも一歩外に出れば本当の自然はどこにあるのか。今の世の中にはない。森に行っても、ほぼ人間の手が入っています。人間の歴史は、自らの身体も生態系も、テクノロジーを組み込んで、環境も人間も科学技術によって進化させてきました。我々の活動の意味、人間が存在する意味だと思えます。科学技術により環境を作り変えながら、自らを作り変えながら進化する。それ故、人間と科学技術は切り離すことができない。科学技術なしに人間の持続発展はありません。人間は最初から科学技術と融合しているのです。

人間とは何か分からないので、大学で人間を様々な視点から研究しています。経済、医学、法学、教育、全て人間とは何かという疑問に向かっています。でも1つだけ、人間の定義は、技術が進歩する毎に変わってきています。



例えばパラリンピック。200～300年前でしたら障害者は肩身が狭かったが、現在の社会は昔と違って普通に生活しています。義手や義足を使用している、以前とは違い、多くの人が普通に受け入れている時代になってきたと思います。科学技術により人間は明らかに進歩し、定義を変えているわけです。でも人間が定義を変えていることは、人間は動物とは違う。人間は科学技術により進化している。そこが最も大きな違いで、人間の本質的な姿かと思えます。

一方で自然も定義不能です。人間の定義がなければ自然の定義もない。自然を調和がとれ、持続発展可能な生態系と再定義すれば、人間は科学技術で自然になろうとしている。逆に人間は科学技術なしに自然になれない。自然に脅かされ、自然に抗えなかった過去においては、人間は自然と共存する事を目的にしています。しかしある程度自然を凌駕し、生態系を制御する力を得て、複雑な生物としての人間の体も科学で制御可能になる未来において、人間は科学技術で自然を自ら作り出すと思えます。

地球温暖化の問題もそうです。地球温暖化の問題は人間に原因があると考え方は多いと思えます。一方で、克服するために新たな技術で人間がさらに自分たちの行動抑制し、新たな科学技術を生み出そうとしています。自然とは何か。人間とは何か。この非常に根本的で難しい問題に取り組んでいく。それを科学技術で明らかにしていくのが、これからの未来です。自然の脅威に耐えた太古の昔があり、人間は自然と共存をしてきました。現在、人間は科学技術により自然災害を制御し、新たな化学技術を生み出してきました。自然と共存する現在。目指すのは科学の力で自然をつくる。そういう未来になるべきだと考えています。どの様な科学技術で、どの様な自然がつけられるのかを展示し、世界に向けて発信していく。これも万博の非常に大きな役割になると思っております。

目指すのは、科学技術で自然を。私自身は人工超自然と呼んでいます。人間も同じなのです。人間は今からもっと科学技術で進化する。昔の人から見ると、20歳までしか生きられない時代から比べると70歳、80歳まで生きる我々はスーパーマン。自然も同じように進化していくと思えます。里山は我々にとって快適な自然かと思えますが、考えられた技術や人間の知恵が反映されているから快適なわけです。その様な技術と従来の生態系の融合は進めていくことができ、それを人工超自然と呼んでいます。

自然を超え、神話的で、人間や人間社会を持続発展可能にする人工的な自然。それこそが本当の自然。自然を制御不能な完全にナチュラルなものとして定義すれば、まずそこに人間は入らない。人間が生きていけないような、例えば火星とか金星とかには、もしかしたら本当の自然があるのかもしれないですけども、人間が発生し、人間が環境や人間そのものを作り変えている地球上においては、人間抜きで自然は一切定義できない。我々は十分な力を持ってきました。だから生態系には責任を持ち、手を鳴らしていかなくてはならない。生き延びれば何しても良いという50年前とは違うわけです。生態系のバランスも考えた技術開発をしていく必要があります。

色々な人工超自然の例として、人間の体が完全対ウイルス機能を持つような体にする。人間の生身の体よりも運動能力の高い体を持つようにする。複数の人格を自由にデザインし、其々の人格に合う環境で自由に活動できる。いつでもどこでもリラックスし、様々な発想を得ることができる。部屋が公園よりも居心地よく、自然を感じる空間になる。これからできる事は沢山あると思えます。それを万博の中で展示して、皆さんで共有し、議論したいと思っています。これが私のパビリオンの根本的に目指す方向性です。大阪・関西万博は、いのちの万博ですが、科学技術に支えられたいのちの多様性をお見せできれば、また持続発展可能なSDGsの目標にある社会を、どの様につくっていけば良いか、皆さんで共有でしたいと思っています。

万博には大きく3つの要素が必要で、1つ目は正しく展示をすること。2つ目は展示を世界中の人に見ていただく事。今、コロナ禍で多くの方が苦しんでいますけれども、コロナ禍後の世界最大のイベントとして、多くの方が集まり楽しめる。その仕組みを持つ万博にしないとイケない。3つ目は様々な人が集まれば、多様な人間のいのちや多様な環境、自然の在り方を議論する事ができるので、後世に大きなレガシーを残せると思っております。

大阪なので50年前に万博がありました。当時は生きるのに必死でした。科学技術で生活を豊かにしたい強い思いがあり、環境の問題より豊かに生きるのと世界中が高度に発展した技術社会を目指していました。今でも通用するような沢山の科学技術が展示されました。象徴的だったのは、その科学技術に囲まれ、真ん中に岡本太郎さんの太陽の塔があった。太陽の塔は、いのちの塔そのものです。太陽の塔の中には進化の木が入っている。岡本太郎さんの「芸術は爆発だ」というのは、いのちは爆発だ。それをまさに象徴するような造形物が太陽の塔だったと思えます。



科学技術に囲まれ、支えられながら、いのちを輝かせる事が50年前の万博でした。生物として自然の摂理に従って生きる人間がいて、その人間が安心、安全、快適に生きる為の科学技術は何を作ればいいのか。そこでは世界中が1つの方向に向かっていった気がします。科学技術に支えられた豊かで似たような世界。皆が憧れる世界に向かい、どんな技術が必要かというのを展示していた。それが50年前だったと思うのです。

今、我々は十分に生き残ることはできています。もっと寿命は延びると思いますが、科学技術で自分たち人間だけが生き延びれば良いという時代ではなくなって

きています。生態系全体含めて、人間が責任持たないといけない時代になってきました。例えばブレイン・マシン・インタフェース。人間の脳をコンピューターで補強するような技術は、本格的に開発に取り込まれるようになってきました。例えばイーロン・マスクのニューラリンクも、その会社の1つです。大阪大学でも研究が進んできております。さらには遺伝子治療、遺伝子を改良し、益々健康になる。生まれる前から病気を抑制する治療も始まってきています。

遺伝子と脳は人間にとって最も根本的で大事なものです。私が30年前に大学のスタッフになった頃は、気軽に手を出てはいけないと先輩の先生方から聞いた覚えがあります。でも今はその部分の技術開発が進んでいる。それほどどの様な時代になってきたかという、人間が人間を設計する。かつて我々は生きるのに精一杯で、神様に生かされているという時代でした。でも今は人間も設計するし、環境の生態系にも大きな影響を与え、生態系も地球温暖化の問題で皆さんが取組まれているような生態系をコントロールする、制御する、いわば神様がやってきた事を、我々人間が責任持ってやらないといけない時代にましました。

そうすると1つの科学技術に支えられた単に豊かな世界を目指すのではなく、色々な世界を目指していく必要があると思います。要するに生態系を、どれくらい負担かけていいのか、かけてはいけないのか。人によって考え方は違いますし、人間においても同じです。遺伝子をどの様に改良すればいいのか、1つの答えがあるわけではない。脳とコンピューターも結び付けて良い事もありますが、そうではないと言う人もいます。

我々人間が自分で将来を選択できるようになる。かつては生き残るのが精一杯で将来の選択よりも生き残るための科学技術でしたが、これからの科学技術は人間を含んだ生態系そのものを人間が責任持って設計する科学技術になると思います。答えは1つ出せば楽ですけど、そんなことは到底できません。寧ろ多様な価値観と幸福感で様々に発展する社会を色々作り、皆で共有し、どれが良いかを大きな試行錯誤を皆で行う時代に入ると思います。

そうすると若い人から未来が分かりにくいと言われる。未来がどうなるか分からないし、何していいか分からない。そこで万博の大きな役割があると思うのです。未来がどのくらい多様な価値観と幸福感で発展していくのか。人間だけではなく生態系の問題をどの様に考えると良いのかを考えるチャンスを多くの人に与える。1つの未来を共有するのではなく未来に対する様々な思考を共有するのが、この大阪・関西万博の最も大きな意義です。残すべきレガシーは多様性のある人間の未来、環境の未来を皆で共有するのがレガシーになると思います。

技術と融合することにより、いのちの可能性を拓けるのが私のパビリオンの目的です。1970年の大阪万博から50年を経て、いのちを自ら設計することが人類の未来ではないだろうか。人工臓器、遺伝子操作、人間らしいロボット、AIによって、人間の定義を拡張し、人間を進化させる科学技術。人間は動物のような生物的進化の方法だけでなく、科学技術による進化の方法を持っている。それを人間が人間に至らしめている。これからの人間は、さらに科学技術を発展させ、科学技術を融合しながら、いのちの可能性を飛躍的に広げ、その多様な価値観と幸福感で人間自身や人間社会、それを取り巻く環境や生態系を発展させていく。いのちのパビリオンでは、いのち、人間と人間社会、環境を含めた新たな在り方を協賛の企業さんとか、皆さん、幅広い色々な方々と共有したいと考えています。

具体的には技術が支えるいのちは義手、義足、ECMO、ブレイン・マシン・インタフェース等沢山あるわけ

です。一方で、いのちを設計する遺伝子操作の技術も益々進んできています。iPSの技術もあります。さらにはロボットも益々と人間らしく進化していきます。一番近い例で言うと自動運転の車。恐らく、言葉でやりとりする仕組みがつけられるようになりました。高齢者が田舎で使われるのが最初だと私は思っています。田舎では交通手段として車は必要不可欠で、高齢者に自動運転の車を使用していただくには、パソコンで操作するのは難しく、「病院に連れてって」と言ったら、車が「はい」と言って病院に連れていく。その自立したロボット、対話ができる相手になっていくのが自動運転の車だと思います。

単なる自動車という存在があるのではなくて、高齢者の方とコミュニケーションしながらサービスを提供できる新しいいのちが生まれてくると思います。その未来のシーンを私のパビリオンでは展示したいと思います。これまでも、ロボットを使った演劇を行いました。短い3分から5分ぐらいのシーンを実際に展示させてもらい、こんな未来も、ああいう未来もあるという事を展示したいです。

人間の未来を展示しようと思えば年齢に応じて、それぞれ関わる施設があるわけです。0歳だったら病院。10歳だったら学校。そこから大学に行って、職場で、65歳からもう1回新しい暮らしが始まると思うのです。最近の長寿の研究を見ると、30年から50年後は150歳の人が出てくる可能性も十分にあると思います。

老いは、ある種の病気であるということで、老いさえ治療できると最近言われています。30年から50年後はどの様に変化していくのかと。パビリオンは狭いので、例えば病院も学校も高齢者施設もつくる事は難しいですが、未来のシーンはバーチャルリアリティーとかコンピューターグラフィックスで表現しながら、その中の、ごく特徴的な1シーンを取り出して、5つ6つ程度、パビリオンの中で展示させていただきたいと思っています。未来を考えるのに色々議論していますが、どの様な技術があると、どの様な社会になり、その社会では何が常識になるのか。皆がどの様に暮らしを変えるのか考えています。

寿命が150まで延びたらどうなるのか。高齢者施設は絶対変わらなと思うのです。かつての高齢者施設は仕方なく入るところで、今は自分がお金を貯めて、できるだけいい高齢者施設に入らうとする。50年後は人生の目標が高齢者施設に行く事になるぐらいの楽しく明るい高齢者施設にならないかなと。100歳を超えて生きた人に、さらに生きろ、もっと仕事しろとか、そんなこと言う人いないと思うのです。現在、無理やり生かされていると思われる方もいると思いますが、終末は自分で決められるようになる。好きなだけ生きて、満足して旅立ると。そんな老後になる気がします。

尚且つ十分に社会に貢献されているので、もっと自由で開放された人生が100歳を超えた人生。そうなる施設も当然明るくなります。だから天国のような明るい高齢者施設になるのではないかと。その未来も十分考えられるわけです。さらに寿命が50年、今の倍になれば社会的な死に対する概念も変わるし、そもそも体も元気になったままに第3の人生を豊かに送れるようになると思います。

学校も同じように考えられます。学校がなくなる。要するに、勉強は個人指導したほうが効率よく勉強できます。学校は皆で議論したり、お互いに友達作ったりモチベーションを養う場所だと。勉強は個人でやるとすると、スマホのようなデバイス使い家でやる。先生がアバターで家に来て教えてくれる。個人でやるのだから、自然の中で遊びながら勉強する。

学校がなくなったら一体世の中どう変わるのか。もっと自由で楽しい学校生活になるのではないかと。そんな風にチームメンバーと色々考えています。世の中を変える革新的な技術はいくつもありますが、その技術が世の中をどう変えるのか。例えば人間の寿命を倍にしたら、社会的には何が常識になり、どの様な生活になるのか。我々の考えていることを皆さんと共有してもらいながら、パビリオンに参加いただきたいと思っています。

このパビリオンを実現するには、議論だけではなくて技術も必要なわけです。企業さんの最先端の技術に支えられた未来、例えば寿命が倍になる未来、学校がなくなる未来とか、他にも色々ありますが未来です。それを皆さんと一緒に展示できれば、これはもう永遠に残るレガシーになると思います。これから生き延びるだけの未来は、もうなくなると思うのです。自分で次に何をするのか。どの様な未来をつくるのか。真剣に考えて生きていく事が我々の非常に大事な役目です。それをこの万博から始めていく。新しい人間の生き方をこの万博で提示する。

その未来に加えて、もう1つやりたい事は1000年先の人間です。1000年先か1万年先か分からないですが、太陽の塔は人間のいのちを表していて、その中に進化の木が入っていました。原生動物が人間まで進化したのが太陽の塔なのです。一応その太陽の塔の向こうを張って、さらに今から1000年、1万年、10万年たったら、人間はどう進化しているのか。太陽の塔みたいに大きなものは作れないので、小さなもの

でもつくれると、楽しいかなと思っております。

もう1つ重要なのが、このパビリオンのすぐ隣にある静けさの森です。私のパビリオンでは人間のいのちを中心に展示しますが、万博全体では人間も含む生態系全部を含むいのちを展示していくわけです。その最も重要な象徴的な空間が、この静けさの森。これをいかに立派につくるか。この静けさの森も人工塔の上につくっていくので、色々な新しい林業のテクノロジーに支えられた森になることは間違いないわけです。この様な生態系のいのちを象徴する森の下に、森に寄り添うようにパビリオンがあるので、人間のいのちというのは、より輝いた展示になると思っています。

人間のいのちから環境のいのちへ。最先端の技術に支えられ、埋め立て地や潮風があたる場所でも豊かに育つ樹木。あらゆる場所に生物のいのち。それを支える動物のいのち。小さい動物、昆虫等色々なものがそこに関係してきますが、それを育む技術というのは何なのか。科学技術と融合した人間にとって、自然以上に自然で快適な人工超自然のつくる未来が再現できると良いと思っています。皆さん、是非協力してください。この森をつくとことは、万博で森をつくるだけではなくて、比較的緑の少ない大阪で、もっと全体が人間を含む生態系のいのちの大事さを考えるきっかけになるとと思っています。パビリオンだけではなく、静けさの森にも色々な協力をお願いしたいと思っています。

会場全体も生態系のいのちを表現し、パビリオンの中で人間のいのちに関する展示をしますが、生態系のいのちの中で、人間のいのちを展示することに大きな意味があると思っています。生きたいいのち、生きたい社会、生きたい環境を自ら設計することが、未来に向かって生きるのが我々の指名です。いのちの未来パビリオンでは、科学技術と融合しながら発展する人間社会、環境も含めた新たないのちの在り方、いのちの未来を展示していきたいと思っています。

この様な展示を通し色々な議論ができると良いです。その議論を取り纏め、この大阪関西万博をきっかけに多様な可能性に満ちた未来が広がっていく。それを世界に向けて配信できると良い。その万博の中で展示を見ながら、アバターの技術で、コロナ禍後でも、コロナのような状況が再び起こっても多くの人が参加できる。そんな万博にしたいと思っています。

アバターの技術も含め色々な人が集まってくれたら、未来について色々な考え方を共有できるし、人間とはどう生きるべきかを考える事が人間らしいと思うのです。人間や自然に1つの答えがあるわけではない。試行錯誤しながら色々な生き方を試して人間の可能性を上げていく。人間とは何かを考える事こそが人間にとって重要で、それを社会全体で行うのが、これからの人間社会だと思います。皆で考えた事を纏めて、大阪いのち宣言という形で後世に残せると、この万博は大成功だと思っています。ご清聴有難うございました。

講演テーマ「いのちのあかし」

河瀬 直美 氏

映画作家

(公社)2025年日本国際博覧会協会 テーマ事業プロデューサー

テーマ「いのちを守る」

石黒先生のお話を聞いていて、とても凄い未来がやってくる、とわくわくします。イメージをすると手塚治虫さんの世界が現実になる感じです。私達のパビリオンの中でも何をやるかというのを絶賛計画中です。オリンピックの公式映画監督をしていたので、この間までオリンピックにどっぷり漬かっていました。いのちというものを考えた時に、生身の人間が、あれだけの記録を出せるのかという感動と、いのちの可能性というものをオリンピックの中に感じました。どれだけ速く走れるか、どれだけ高く飛べるか。それがオリンピックの大前提になっています。でも実は、そこにある精神で最も私が大事だと思うのは、人は人間同士で争ってしまう生き物でもあります。競うというのは、争うのではなくて、互いにスキルを高めていくという、その側面がとても強いのではないかと思います。相手を排除するとか自分だけが良ければ良いと



というような考え方は戦争を引き起こしてしまいます。人が人を殺めることが英雄のように言われてしまうこともある世界の中で、私の中に、あなたもいるのだよ、あなたの中の私も大切にしたいという考え方が世界中に広がれば良いと思います。今回お話しする中で、「いのちのあかし」と題しました。

『それは、きっと人間だけの世界ではない、地球の秩序を取り戻すこと』、この世界は他の動物も植物も、地球そのものも全部、私といういのちとそんなに変わらないと思っています。

そして、『この星に暮らす皆の中の私。私の中のあなたを知ること』。ある日の朝、起きた時にイメージが浮かびました。それは、私は私なのだけど、誰かでもあるかもしれないなという感覚です。その感覚を文字にしたら、『私の中のあなた、あなたの中の私』となりました。

私は奈良で生まれ育ち、1000年前のものが身近にあります。1000年前の建造物、寺社仏閣や仏像がそこにある。1000年前のそれは単なる木造建築や仏像かもしれないですけども、そこにはつくった人の魂が宿り、刻まれている。不思議ですが、生きてるように見える時があり、何か話しかけられているように感じる時もあります。

そんな1000年続く寺社仏閣の中で、東大寺の二月堂で行われている修二会の行があります。通称、お水取りです。お水取りは、去年1270回一度も途絶えることなく今日まで継承されています。はるか昔の話に思えますが私にとっては、毎年続いている3月1日から15日まで続く行事です。「これが来なかったら、春が来ないで」と、おばあちゃんに言われてきて、おばあちゃんもそうやって、おばあちゃんのおばあちゃんから言われて育ったと思うのです。そうやって想像すると、1000年先の人の言葉がイメージできます。奈良はそのイメージができる欠片がある町です。実は去年コロナの影響で、この行事をオンラインでしか見ることができず、お参りができない形になりました。1270回続けてきたものを自分たちの時代で途切れさせることはできないという思いの中、行事が行われました。そして、この1270回目の最後の3日間の映像を撮ってくれないかという依頼が東大寺さんからありました。

夕方ぐらいに僧が尾籠になり、お堂の中で修行をします。修行の形は舞台芸術ではないかと思うぐらい、お坊さんが走ったり、五体投地と言われる体を地面にたたきつける修行をしたり。勿論声明を読まれ、それがコーラスようになっていく。これは舞台芸術の元祖ではないかと思いました。

私は西局という場所に朝まで籠って3日間見続けました。そうすると、この世界が、今か1000年前か分からなくなるのです。僧が走り始めると、時空がどこかに行ってしまうのではないかと。私がどこか宇宙に放り出されてしまうのではないかという感覚になりました。

3日目の最後が終わってから、「河瀬さん3日間大変やったやろうから、ちょっと仮眠して帰ったら」と仮眠させていただき、陽光が降り注ぐ朝日の中で朝ご飯に茶粥をいただきました。ちょっと芽吹いた葉っぱがきらきらと光り、その中で茶粥を口にした時に私、涙がぼろぼろこぼれて止まらなかったのです。これがいのちやと思って。誰かが運んでくれたお食事を口にすること、そして、私だけがそれを食べていると思えない。世界が食べている。世界を潤していると思った時に、様々な国、地域で貧困の差はあるが、ここに生まれ出たもの達が地球上に暮らす素晴らしいものだと思います。『皆の中の私、私の中のあなた』という感覚を、万博パビリオンの中で、皆さんに体験してもらいたい。この世界は素晴らしく、その一部であるのは尊いと思います。

私が一部なんて、歯車の一つなんて嫌だというような考え方が競争社会の中にはあるかもしれませんが。リーダーになりたい、発言力を持ちたい、ディベートしていかなくてはという世界です。世の中を明るい方向に導く一部になれるのであれば、こんなに素晴らしい事はない。この精神性は、日本古来の独特の考え方ではないかと思います。そしてこれが私のコンセプトの始まりです。

私はこの感覚が宇宙の中にもあると思っています。宇宙人がいるかどうかは未だ地球人も体験した事がない。何となく、生物が存在しているのではないかと、火星に行ったのではないかとぐらいです。

何かの本に書いてあったのですが、宇宙人が地球に現れない理由は1つだと。文明が発達しすぎると宇宙にまで行き、宇宙人と対話できる技術を手に入れるが、地球では人間という種が争い合い、自分たちを自ら滅してしまうのではないかと書かれていて、私は尤もだなと思いました。

今の世界の中で、国同士の争い、宗教間の争い、隣の誰かとの違いを認めないで突き進んだ時に、何かを否定してしまうような感覚や考えを、つまり行動を変容できないのか。その具体的な形を、私達のパビリオンでつくっていききたいなと思っています。『時空を超えて、出会いと別れを繰り返してきた人類の終わりのなき記憶の旅路』と『その唐突さと奇跡に思いを馳せる物語を描く』、この形を表現するストーリーは、自分が映画を1個つくること以上に難しい事だと思っています。早く皆さんにコンテンツをお伝えし、私



達と共に未来をつくっていただけるような企業の皆様を、いち早く探したいと思っています。

18歳から30年以上映画を撮り続け、12本の長編作品を創りました。そして最新作が東京2020オリンピック公式映画になります。オリンピックの悲喜交々、人類史上初のコロナ禍の中、やり遂げたオリンピックという意味では、初めての記録になります。日本国民の8割方が辞めたほうが良いと言われていましたが、結果的には無観客という形で開催されました。観客のいないオリンピックは今まで一度もないので、その記録も、とても稀有なものになる。戦争等の理由で中止はありましたが、延期は無かった。けれど、延期によっ

て何が起こるかという、去年であれば選ばれていたアスリートが今年はいれない。年齢的にも、キープするためのお金も必要なので、難しい選択に迫られる。逆にラッキーな形で出場し、金メダルを獲ってしまう事もあります。

こういう明暗を分ける事も起こってしまう。1年延期を選択し開催した事で何があったのかを見ていくと、色々な人たちの立場が見え隠れします。さまざまな立場の人たちの思いが拮抗している非常に難しい体制が、オリンピックの背景にありました。その背景の中で、パラリンピックまで駆け抜けた人たちの姿や、それがあながちながらも良いパフォーマンスをしたアスリートたち。

私自身、この映画の中に感情を入れるというよりは、あまりにもドラマチックな事がありました。3000時間撮った素材を、せめて3時間ぐらいにしないと公開できないという状態の中にいます。皆さんの中にも、たくさんの時間、人生という物語が存在していますよね。その物語の、ある一部をフォーカスし、光を当てて映画を作り出す事を今までやってきました。ストーリーはこれから考えていきたいと思いますが、一番大事にしたいのは記憶です。記憶は記録できない。皆さんの中の記憶は自分の中だけにしかない。アップデートされて、とても悪い状況だったものが良い記憶に変わっている。逆もありますね。とても幸せな状態だったのに、何か悪い記憶に変わってしまう。こういった記憶が、私は未来を創り出しているかもしれないと思っています。この人から見れば良い記憶なのに、あちらの人から見れば悪い記憶というようなことも起こり得ると思います。

そして最も厄介なのは、悪い記憶が深く刻まれ、自分で消し去ることができないことがある。ともすれば誰かを憎んでしまう。相手を否定する事に繋がるのであれば、そこを超えていく考え方をこのパビリオンの体験を通して提示することができれば、とても良いと考えています。

映画が私の分野なので、私は映像を使って表現をする事になると思います。ただ、映画というのは戻せない。皆さん、映画館に見に行かれたり、家でDVDを見ている時は時間を巻き戻せないですよね。小説は、「あれ、3ページ前何だっけ」と戻せますが、この0ポイントから、ここではないどこかに運んでいくストーリーを皆さんにつくってもらうような体験ができないかなと思っています。

皆さんの記憶と照らし合わせながらチョイスしていくのです。色々なストーリーが枝分かれして、結果、皆さんが作り上げるストーリーが最終ポイントで完成するという形。私のパビリオンを体験した人は、もう一度そこを旅したくなるような。道の行き方が幾通りもあるので、今回こうだったものが、次はこういうふうになった。そして誰かと行けば、また変容するという。未来の映画というように位置付けられるものを様々な技術を使って表現できないかなと思っています。展示のイメージは記憶とか自分の中の他者との対話。

この対話の部分で少し難しいと思っているのは、来た人達其々に委ねてしまう部分がとても多くなるので、人を選んでしまう事にならないかと。例えば、小学生でも中学生でも体験できるような非常にシンプルな対話であればいいのですが、シンプルすぎると次に発展していく物語に面白みが出なかったりする。その映画をつくるような、とても複雑な数式を解いていかないとと思っています。それを体験した皆さんが、未来の映画と感じてもらい、一期一会の体験を、このパビリオンの中で作り出していきたいと考えています。

パビリオンは、今のところ木造、木を使いたいと思っています。私は、先の大阪万博は生まれたばかりなのでこの万博が初めてとなります。岡本太郎さんの太陽の塔の前で乳母車に乗せられて写っている写真は

あって、生まれてはいるのですが、全く記憶はない。しかし、そこで語られたのは、岡本太郎さんは前面には太陽と表現されていましたが背中には黒い太陽があり、やはり人間の中の、今言ったような明るい方向にも表現する私達と、黒いものを持っている私達という、その両面を、あの時代から私達へのメッセージとして持たれていたと思います。

あの時代、益々経済が発展していく中で、手塚治虫さんにしても岡本太郎さんにしても、私達の世代に託した大切なものがあつたと思います。ですから、今回のパビリオンも短期で建てて、半年間やって、崩してしまうというのではなく、それをどこかで再利用できるような形。例えば古い時代のもので言えば宮大工は、木を組んで釘を使わずにやっていますから、全て解体した後に、どこかに移築する可能性だってある。

木も、曲がった木は製材所に行かないで捨てられてしまう。だけど、この曲がった木の特徴を生かし、建築に使えるという可能性をパビリオンの中から提示、提案もあると思っています。つまり人と同じように、様々な個性を生かして存在するパビリオン。見た感じは個性的な材木が支え合って完璧な形をつくっているという建造物を目指したいと思っています。

私は平城宮跡から見る奈良の夕日が大好きです。二月堂からの夕日も大好きですが、西の空に太陽が沈んでいくのは、ちょっと物悲しいイメージではありますが、西方浄土と言われるように、あそこには何か次の世界に続く神々しさがあると思っています。今日は太陽が綺麗やなと思ったら、1人で平城宮跡に行つて、ぼんやりと太陽を見ています。

奈良は掘れば何か出てきます。何か出てきたら1年ぐらい建物が建てられない状態が続きます。大きな礎石が出る。木簡なんか、ごろごろ出てきてしまう。その木簡の中に書かれたものというのは、特にドラマチックな事は書かれてなくて、米何本とか、税として納めたような、その時代の人の名前等が書かれています。

石黒先生も「静けさの森は作らなあかん」とおっしゃっています。静けさの森に関しては、私はいのちを懸けてもつくと考えていて、全国の専門家の方にヒアリングしています。夢洲という場所に適した木が何であるか、そして木を持ってくるだけではなくて、ここに生き続ける形を提示できればと思っています。山の中に放っておけば生えてくるようなものではなくて、夢洲はもともと海ですから、海の上に埋め立てた、その場所で木や森を存在させるというのはチャレンジだと思っています。

木々の秩序を作り上げながら生態系を戻し、継続し、木がバランスをもって成長する形ができれば良いのですが、専門家の方々は難しいと言われます。海水になってしまう立地なので、その土地そのものの土を盛らなくてははいけないとか。また、万博が終われば更地にして戻さなくてははいけないというお約束があると聞いているのですが、何にしても、太陽の塔も終わったら取り壊すと言われていたけど、今、残っているのだから、私達プロデューサーが一生懸命森をつくり、色々な人が関わって継続していけば、恐らく大阪のまち、関西圏が緑化されていく形に繋がって、仲間も増えてくると考えています。

木簡の話に戻ると、こういった時空を超えた感情、伝えたい感情を、紙に墨で書いてもらい、森に埋めていく。こういうことができれば良いと思っています。あとは10代の子たちのユースワークショップを森の中でできれば良いと思っています。有難うございました。

第2部 座談会



〈登壇者〉

◆石黒 浩 氏 大阪大学大学院基礎工学研究科荣誉教授

ATR 石黒浩特別研究所所長(客員)
(公社)2025年日本国際博覧会協会 テーマ事業プロデューサー
映画作家

◆河瀬 直美 氏

(公社)2025年日本国際博覧会協会 テーマ事業プロデューサー

◆廣瀬 茂夫 氏

(一社)関西経済同友会 常任幹事 事務局長

◆栗原 智一 氏

(株)竹中工務店 夢洲開発本部 MICE/IR 推進室 副部長

(一社)夢洲新産業・都市創造機構 幹事会員

◆飯田 陽子 氏

東大阪市 企画財政部 企画室長

(一社)夢洲新産業・都市創造機構 幹事会員

進行

◆石川 智久 氏

(株)日本総合研究所 調査部 マクロ経済研究センター 所長

(一社)夢洲新産業・都市創造機構 幹事会員

石川氏：石黒先生、河瀬先生、2人の万博プロデューサーに、夢洲機構がどういった協力ができるのかを議論させていただきたいと思います。まず、プレゼンを聞いた感想をお願いします。

廣瀬氏：石黒先生はかなり前から活躍されておられますが、その一貫したテーマは「人間とは何か」と受け止めています。機械との関係から「人間」そのものをずっと議論されている。それが今度のパビリオンで実現していくと思うと本当に楽しみにしております。

機械が人間みたいになっていく、人間が機械みたいになっていくということですが、私自身も、人類が発展していくと、そのようになっております。遠い未来には、生命が炭素体でなくてはならないという理屈もないでしょうし、そうすると宗教の概念も変わってくると思っています。今の世界の紛争というのはかなり宗教が背景になっていますから、概念が変わってくると非常に良い社会になると思って先生のお話を聞きました。

石黒先生のお話しの中に、複数の人格を自由にデザインするという概念がありましたが、イメージすることがなかなか難しいと感じます。自分の人格が変わるとどうなるのか。どの様な個性のある人格にしていくのか、構想があれば聞いてみたいと思います。

河瀬先生のお話に東大寺が出てきており、非常に興味深く聞かせていただきました。確かにこれまで1270年続き、これから1000年後もやっている。人類の歴史からすれば一瞬だろうと思いますが、我々も1ページを築いているわけなので、これ1年でも途絶えたらお水取りではなくなるので、非常に重要なポイントなのだろうと思いました。



栗原氏：石黒先生のお話の中で本当に響いたのは、これまでは神に生かされている世代だった、これからは自らが神に変わり、色々なことをコントロールしていく世の中になってきたと。我々が選択する事は、とても重要な世の中になってくる。そこを皆で議論するような世界をつくらなくてはいけないと改めて考えさせられたと思っています。一方でAIとか、人間が逆に楽に、もしくは何も考えずに生きられる、便利な技術もできている。そこを人間が努力しなくては、この様な未来は実現できないと改めて考えさせられました。河瀬先生のお話では、私も東大寺のお話。とても大事

で、人の思いが受け継がれてここまでやってきて、それが 1000 年を超えて行っている。これは同友会のグローバル適塾で、春日大社で神事に参加させていただくというプログラムがあります。そこに参加することで、神と一体となる神事があるのです。神と一体となった、自分が神になったみたいな感覚。それは人が思いを繋いでいかななくてはいけない思いだと。それを体感できたのは、とても貴重な体験で、そういった体験を映像を通して体感できるような、そんなパビリオンになったらと思ってお聞きしていました

飯田氏：ロボットという難しいという思いばかりが先行しておりました。しかし未来を考えたときに、例えば人間が 50 年さらに長く生きられる世の中になった時に、私も自治体の職員ですので、高齢者の施設という最期を看取る場所というイメージしかないので、先程の石黒先生のお話を聞きますと、行きたくなる場所にならなければいけないと思いました。これから高齢化社会は益々進み、長い期間生きるためには健康に、より楽しく生きるために考えなくてはいけないと思っております。その中で先生の方から楽しい高齢者施設、行きたい施設をつくって行くと言っていた事で未来に希望が持てましたし、私達もその気持ちで取組んで行こうと思いました。また学校についても、今までの概念は今後 50 年先はとて変わっていくと実感しています。



今後の未来について、未来に対する色々な思考を共有する。それこそが万博のレガシーとの事ですが、未来はこうなるのだよと示されてばかり今までいたなと思います。そうではなくて私達一人一人が、こういう未来になって欲しいというのは色々あって当たり前の話で、皆一人一人の未来を共有する事が多様性を認めていく社会に繋がっていくと実感しました。

河瀬先生のお水取りのお話では、今まで 1270 年続き、今後も 1270 年続くのではないかと、その思いを受け継いで茶粥を食べられたときに感動されたのだと感ずることができました。

先生の映画、『朝が来る』を拝見したのですが、いのちのあかしの部分で「人間だけの世界だけではない、地球の秩序を取り戻す」と仰られていましたが、映画を観てとても感じたのは、人間だけを撮られているのではなくて、森や水、海、色々な風景をとて大事に撮られていると思いました。ただ何か感覚が違うなと思っていてのは、やっぱりその全てに、いのちがあると思いつながりながら撮影をされているので、森も海も川も、全てが生き物として感情を持っているような、風の音、その表現を大事にされて撮られているなど、今日のお話を聞いて感動したところです。

石川氏：石黒先生、我々の感想の中に、複数の人格をデザインする、AI 等で人間が楽しくやっつけける話と、一方で、我々が色々選択しなければいけない等、多様な未来を共有することが大事だと意見がありました。そういった話について、どういったパビリオンでその世界を表現していくのかをお聞き願えればと思います。



石黒先生：まずは複数の人格という話はアバターの話なのです。最近、会社も作ったのですが、アバターで働き方改革を考えています。インターネットの仮想世界、色々な SNS の世界で、皆違う人格で色々な SNS を楽しめるようになりました。でも実世界は生身の体 1 つで、人格も 1 つしかないのです。よく考えてみたら、会社の中、学校の中、家庭の中等、人間は人格を都合よく取替えて活動しているのです。会社の中の自分は 1 人ですが、そこにアバターを使って働けるようになると色々な人格で実社会の中でも働けるようになります。僕はそれを実社会の仮想化と言

っているのです。Zoomを発展させたようなのがアバターだとすると、アバターで実世界の中で、もっと色々な自分になって働けるようになるのが、これから起こってくることで、このコロナ禍を耐え忍んだその先に出てくる新しい最も大きな技術と思っています。

小さなロボットで働くと、可愛い感じになるのですよ。最近、私NHKで取材受けているときは、大体小さいロボットで受けています。そっちのほうが自然だと言われるように。

色々な人が色々な形で働けるようにしたい。そこでは色々な人格を楽しめるような、その体験ができるかと思えます。それから、AIと人間の努力があると言われたのですが、いつも新しい技術が出てくると人間が怠けると歴史的に繰り返されているのですが、単に繰り返しているだけなので、必ず社会は発展します。だから違う仕事を見つけるのです。それはもう本当に歴史的に繰り返されていた議論で、AIが色々な事を行えたら、残りの時間、人間はもっと豊かになってもっと違うこと考えますし、芸術家増えるかもしれない。脳を記憶するとか単純な計算するなんて事に使わず、もっとクリエイティブな事に使えるようになると思っています。

あとは一人一人の未来を共有する、この表現の方が良いと思いました。まさに、そうなって欲しいと思います。ロボット社会が来るかというのをアラン・ケイに聞いたことがあるのです。あの人はいつも「未来は自分でつくるものだ」「人に聞くな」と言われます。私自身も、こういう社会をつくりたいという自分のイメージを話すようにしているのですが、それは技術者にとっては、もっと幅が広がると思うのです。皆其々が、こういう社会を作りたい、こういう世界を作りたい、そこで暮らしたい。その夢がもっと実現しやすい未来にならないといけません。全部が同じ方向を向く必要ないし、まちが変われば違う世界があってもいい。その多様な世界があると、このまちは住みづらかったけど、こっち側行ったら良いというようになると良いと思っています。

石川氏：有難うございました。未来は自分でつくる、石黒先生のパビリオンのキーワードになると思って聞いておりました。

河瀬先生、やはり皆さんの質問の中に多かったのは1000年の言葉で、面白いのが石黒先生は1000年後の未来の話をしていて、河瀬先生は1000年前の話をしました。1000年経つと色々なものが変わると思いました。1000年の中に、栗原さんの言葉で神と一体となったとあり、多分人間は神とも一体になるし、自然とも一体になる。その世界があり、その意味で東大寺や1000年という言葉の中でどの様な一体的な世界を見せていくのか。その時に例えば、我々が協力できるようなことがあるか、コメントお願いします。

河瀬氏：オリンピックの中核にいらっしゃる方々の姿を見ていると、やはり人間は何か新しいものをつくりあげるときは何かを捨てなくてはいけないと言えます。石黒さんは、夢と希望を持たれて未来をつくっていかうとされています。AIが出てくれば、計算のためだけに勉強するのではなく、もっと芸術的なクリエイティブな事に自分自身を使うことができると言われていて、もし本当に実現すればこんなに凄い事はないのです。ですが、今の段階ではまだできていない。日本の教育の中では対応力のある人間を育成する事ができていないので、教育にもう少し大きな改革をしないと行けない。

人格を形成されていく社会の中で、学校教育がいかに影響力を持つのか。未来を想像して何かを言える人が必要。私達の世代が何を言えるのかというところに大きな迷いがあるのです。だから皆さん、まずは自分に問うという事。そして誰と手を繋げばつくる事ができるのかを必死で考えないと未来が全く明るい方向に行けないと懸念しています。

私は物語の中で、明るいものばかりではなく、まずネガティブなことを描く。例えば、差別や戦争や争いの感覚を、そして、社会の中で孤独に苛まれている人を主人公にする。スーパースターは描かず、社会の日陰の部分に生きている人たちにフォーカスを当て、その映画を見ていただくことで自分とは違う場所に生きている人、知らなかった事を知ってもらう。



それを私は奈良にいるからこそ、1000年前の世界をもう一度フォーカスし、先人達が繋いでくれたメッセージを今伝え、未来が明るい方向に繋がっていければ良いと思います。

石川氏：確かに河瀬先生の映画はネガティブなところにも目を当てつつ、最後は生きる希望が湧くって感じではあります。廣瀬さん質問はございませんか。



廣瀬氏：本当に暗い部分というのは、なかなか見づらいのですよね。この前も、『あん』という映画を途中で涙出て観られなくなって。なかなか直視できない我々がいる。それを、どう直視していくかは非常に大事だと思います。

また、石黒先生のアラン・ケイの話は、同感です。かつて私がエコノミストだったころ、色々な大学で講義をしていた時に必ず学生さんに言っていたのは、このアラン・ケイの言葉でした。

「将来、どうなるのですか」って聞く人いますが、将来のことは分からない。だから、つくっていく事が大事だと。つくっていくことに関しては無限の可能性が

ある。

今回の万博についてお話しさせて頂くと、「万博」という言葉の意味合いを考える時期に来ていると思っています。万博、万国博覧会と言っているわけですが、英語に直すと World Exhibition、世界博です。万国博ではないということです。国際博覧会協会の協定がありますが、それによると Universal Exhibition ということであり、国はどこにもないのです。万博という言葉で言えば、「万国博」ではなく、「万人博」ではないかと思っています。

20世紀の万博でしたら、国の国威発揚という方向で進めば良かったと思うのですが、21世紀の万博は人類課題の解決であるということでもありますので、国を超えた課題が出てくる。それは色々な文化の背景で解決していく。その1つの解決の方法として、日本国というより日本人が持っている考え方が貢献できないか、その切り口だと思っています。

色々パビリオンが出てくるわけですが、国のパビリオンもあれば企業のパビリオンもある。そこはなかなか万人博にはなれないので、ぜひパビリオンの中でも、テーマ館は万人博の柱になったら素晴らしいのではないかと思います。経済界の中でも本当に色々な人が万博に関わりたいて言ってきていますので、その人たちと繋ぐ役割を我々もできると思いますので、ぜひ万人というのを念頭に置いていただければと思いました。

石川氏：廣瀬さん、有難うございます。万人博という重要なキーワードをいただきました。夢洲機構も企業だけではなく、自治体や大学も入っておられ、万人の機構になっています。その意味では、皆の力で万博を盛り上げたいと思っています。今度は河瀬先生、石黒先生の順番に聞きたいのですが、今の廣瀬さんの万人博という言葉聞いて、どの様に感じられたか。関西の人たちとどんなコラボレーションしたいのか、お願いします。



河瀬氏：万人博、色々な人たちがいるということ。自分がしてきた表現の中には、そして生き方の中にはまさにそれがあります。関西で言えば、私は奈良に生まれ育って。だけど東京のスタッフと映画を撮るということが多い。東京の人と話すときには、言い方を変えています。



日本語でも、言葉の持っていきようが多分違うのです。

東京オリンピックは東京でやっていた感覚があるのですが、万博は関西、大阪で情熱のまちなので、勢いで何かをやってしまう。それこそ、ある意味ごった煮という感じもある中で、関西の人と一緒に話していると本音も出る。私は、最近情報番組も出ているのですが、東京の情報番組だと台本があり打ち合わせもきっちりやるのですが、関西の情報番組は打ち合わせがなく、出たところ勝負みたいな感じです。それを皆さん、滞りなく纏めて1本の番組を出しはるので、適応能力が高い。

それぞれに自分を持ちながら、相手をリスペクトしながら、ボケとツッコミを繰り返して、とても面白い対になっている。皆、とても元気になると思います。私のつくっている映画はちょっと湿った感じの映画が多いし、難しいと言われることも多いですが、実は本当に根っからの関西人なので、是非一緒に腹割って、大阪・関西万博、盛り上げていきたいと思っています。ご一緒させていただける企業さんがいらっしやったらアクセスしてもらいたいと思っています。宜しくお願いします。

石川氏：有難うございます。では石黒先生、万人博という言葉からインスパイアされることと協力できることをお聞かせください。

石黒氏：私のパビリオンは未来を応援していただいている皆さんと一緒につくるというのは、そのままなのです。そこに色々なアイデアとか技術を持ち寄っていただけるような機会をこれから色々つくっていきたいと思いますので、是非皆さん、一緒に未来の展示を作らせてもらいたいと思います。また1000年先、人間がどう進化するか。未来は、皆と一緒に共有するのが万博の一番大きな意味かとも思っています。大学の学生さんも全部含めて、色々な形で一緒にできるチャンスを模索していきたいと思っています。



石川氏：是非夢洲機構としても、色々協力していきたいです。例えば私がやっている第4分科会というところで、世界の子供たちが喜ぶような提案をしたいとか考えていますので、また色々、ご意見を聞かせていただければと思っていますところ。



飯田氏：実際、大阪・関西万博、2025年に行われますが、万博がそもそもどんなものなのか。以前の万博を知っている方々だったら、同じように何か凄い物が展示されると思われているレベルだと思っています。私も万博に関わらせてもらう中で、とてもわくわくする未来を見せていく事ができると分かってきて。もっと一般の皆さんにも知っていただきたいと思うようになりました。

各大阪の地域で万博を機運醸成、盛り上げていきたいと思っています。そうするにはどうしたら良いかと思っていました。例えば万博で石黒先生のような、色々な技術を駆使して未来を見せる。その技術を身近に感じて

もらうことで、例えば、これから生きていく子どもたちに興味を持ってもらいたいと思ったりもしています。技術であったアンドロイド、アバター、先生のアバターを知ってもらうための取組みを、例えば万博前に共催イベントみたいな感じで地域が連携できれば最高だと思うのです。その観点で両先生方が、どのように考えられているかというのを伺いたいと思っています。



栗原氏：石黒先生と河瀬先生のコラボレーションもあると思っています、例えば障がいを持たれている方が自分の身体機能と感覚機能をエンハンスして映像を楽しむという、その在り方も見てみたいという思いがあります。例えば、障がいを持たれている方が付けられる色々なツールがあると思うのですが、そのツールを使うと皆が色々な思いを共有できる。機能や視覚をエンハンスして映像を見るとか、音を聞くとか。そうすると違った体験が生まれるとか、そういった新しい未来のシアターが生まれると良いと思っています。体感する人たちが、皆で共有しながら、今の盛り上がりと思いに繋がると良いと思っています、その辺りをお

聞きできればと思っておりました。有難うございます。

石川氏：飯田さん、栗原さん、有難うございました。質問としては2つ、万博前にできる機運醸成で企業や自治体ができることは何なのかと、石黒先生と河瀬先生のコラボレーションについてどのように考えておられるかをお聞かせください。

石黒氏：万博に6カ月、いきなり展示して終わる事はしないです。それ以前からアバターの技術を万博で展示する未来のイメージは段階的に具体化し、最終的に万博で一番良いものを見せる形にしたいので、定期的にパビリオンのチームがどのような未来図を描いているのかを公表させていただきたいと思っています。

場所は未定ですが展示する予定です。特にアバターの技術は徐々に色々なところで使い、皆体験してもらおうと良いかなと思います。アバターを使う上で1つ大事なのは、障がい者の方も自由に万博に来られるようにする事。ムーンショットというプロジェクトでかなり重度の障がい者の方も万博に来られる為のアバターの研究開発を今全国の研究者と一緒にやっています。その研究成果も万博で展示し、使いたいと思っています。例えばALSの患者さんも万博で楽しめるような仕組みをつくれると思っています。誰もが自由に万博に参加して元気に楽しめるような仕組みづくりを徐々に行う予定です。

河瀬さんとのコラボですけど、また映画か映像に残してもらえると良いと思っています。あとは、静けさの森でイベントをやりたいと思っています。機械や人間、自然が全部融合したらこんなに素晴らしいことになるというイベントを静けさの森でやりたい。2つぐらいアイデアがあって、例えば、ロボットのオーケストラが森の中で音楽を奏でると、どうなるかとか、それから日本の伝統芸能とテクノロジーがどこまで親和性を持って楽しめるのか。それも静けさの森の中でできると良い。静けさの森を舞台と一緒にやれることは、沢山あると思っています。

石川氏：有難うございます。では河瀬先生お願いします。

河瀬氏：機運醸成は静けさの森づくりも今から沢山の子どもたちも関わってもらいたいと思っています。勿論木を植える等もありますが、自分事として関わるという意味では一緒につくれると思っています。その仕組みを考えたい。それこそ、お水取りの1000年続く仕組みはきっとあるのです。宮大工が20年に1回造替や遷宮をするのも仕組みなので、自分だけではなく、次の世代に繋がる仕組みを今からつくらなくてはと思っています。

石黒先生も含め、他のプロデューサーの皆様も、この事業プロデュースはいのちをテーマにしているので、いのち広げる、守るといふ全部がいのちに集約される。そこは皆で一体になって何かしたい。それ

は、もちろん静けさの森。森と海は繋がっているので、広場の部分も一緒に皆が何かできるような場であれば良いとプロデューサー達と話をしています。石黒さんは、いつも「大阪の万博やねんから失敗でけへん。大阪で生き続けているんやから」と言われ、この魂のこもった言葉はいつも皆を動かしています。皆が素晴らしい知識とスキルを持っている人達だから、これだけの人が集まる事はないと思います。



石川氏：有難うございます。石黒先生、河瀬先生のお人柄が大変出てきた素晴らしい座談会だったと思います。

あと4年後ですが、また進展があると思うので、またこの場に来ていただいて、進展ごとに報告していただけると我々手伝いたくて仕方がない関西人の集まりですので、益々絡んでいきますので、益々アピールしていただければと思います。どうも有難うございました。